

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：30107

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12217

研究課題名（和文）ドイツ・プロテスタンティズムにおける「リベラル／デモクラシー／共和国」の問題

研究課題名（英文）'Liberal/Democracy/Republic' in German Protestantism

研究代表者

小柳 敦史 (KOYANAGI, Atsushi)

北海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：60635308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は主として以下の3点である。「学問の無前提性」をめぐる論争の分析を通して、キリスト教の絶対性の主張をも反省的な検討に付すことができるというプロテスタント的なリベラリズムの自己理解を確認した。ハルナック、ブセット、バウムガルテン、トレルチにおけるカーライルの受容について分析した結果、カーライルの議論が単純化された上でキリスト教精神を持った指導者への待望に利用されていることが判明した。ヴィルヘルム期からヴァイマル期にかけてのトレルチのデモクラシー論を分析したところ、トレルチは一貫して貴族主義的民主主義の実現を訴えており、それをキリスト教的社会主義と特徴づけていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴァイマル期の神学思想に関する近年の研究においては、もっぱら「前線世代」が考察の対象となり、実際にはヴァイマル期にもまだ社会の中枢を担い、学問的にも活動を続けていたヴィルヘルム世代の思想家たちに対する関心は著しく低いと言わざるを得ない状況にある。本研究は、このような研究状況の欠落を補う学術的意義を持つ。

さらに、本研究課題にはリベラリズムへの反対が国際的にも国内においても勢いを増す中で、リベラリズムの意味を問い直すという今日的なアクチュアリティもある。本研究により、キリスト教思想とリベラリズムの複雑な関係の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are mainly the following three points. Through an analysis of the controversy over the 'presuppositionlessness of academic studies', I have confirmed Protestant liberalism's self-understanding that even the exclusive claims of Christian Absoluteness can be subjected to reflective examination.

Analysis of the reception of Carlyle in Harnack, Bousset, Baumgarten and Troeltsch reveals that Carlyle's arguments are used in a rather simplistic way and used as a longing for a leader with a Christian spirit.

An analysis of Troeltsch's theory of democracy from the Wilhelman to the Weimar era makes it clear that Troeltsch consistently aimed to realise an aristocratic democracy and characterised it as Christian socialism.

研究分野：近代ドイツ宗教思想史

キーワード：プロテスタンティズム リベラリズム デモクラシー ヴァイマル共和国 トレルチ ハルナック
ブセット バウムガルテン

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景には、1)第一次世界大戦研究の進展の中でのキリスト教思想史研究の遅れ、ならびに 2)ヴィルヘルム期からヴァイマル期にかけての思想史研究における世代的断絶を強調する潮流、の2点に対する問題意識があった。

2014年に第一次世界大戦開戦から100年を迎えたことを契機として、現代社会の起点としての第一次世界大戦の意義に関する考察が展開された。わが国においても、京都大学人文科学研究所の「第一次世界大戦の総合的研究」班を中心として充実した成果が生み出され、『現代の起点 第一次世界大戦』(全4巻・岩波書店、2014年)などにまとめられた。しかし、とりわけわが国での第一次世界大戦研究においては、当時のヨーロッパ社会について考察するならば本来欠くことのできない要素である、宗教やキリスト教、あるいは神学者たちの果たした役割に対する関心が低く、前述の論集でもキリスト教に関する議論は含まれていない。申請者はこうした欠落を補うべく、科学研究費補助金の助成(2012-2013年度研究活動スタート支援「文化プロテスタンティズムに対する第一次世界大戦の影響についての思想史的研究」;2015-2017年度若手研究B「ヴァイマル期保守革命論の再検討:「ドイツらしさ」とプロテスタンティズムの関係」)を受け、研究を進めてきた。本研究は申請者のこれまでの研究を発展させ、第一次世界大戦がドイツにもたらした結果であるヴァイマル共和国とそれを支えた理念について、プロテスタント思想史の問題としてアプローチを試みたものである。

ヴァイマル期のプロテスタント思想史については優れた研究が存在するものの、そこには世代論によって規定された関心の偏りがある。P・ゲイの古典的と言える研究においてすでに「父」と「子」の対立という図式が現れているが、D・ポイカートによる鮮やかな分析によって「ヴィルヘルム世代」と「前線世代」の対立という世代論が導入された。この述語とそれによって設定された議論の枠組みの影響力は大きく、プロテスタント思想史においても、K・バルトやF・ゴーガルテンによる「弁証法神学」の台頭が「聖なる前線世代」による、古い世代に対する異議申し立てであると解釈され直されている(F・W・グラーフなどの研究を参照)。申請者もこのような解釈に基本的には賛同するものであるが、こうした研究においては新しく台頭してきた「前線世代」が考察の対象となり、実際にはヴァイマル期にもまだ社会の中樞を担い、学問的にも活動を続けていたヴィルヘルム世代の思想家たちに対する関心は著しく低いと言わざるを得ない状況にある。

以上のような研究状況にあって、ヴァイマル共和国を支持した神学者たちに決まって用いられるのが、F・マイネッケに由来する「理性の共和主義者」という常套句である。すなわち、ドイツ帝国の敗戦とヴィルヘルム帝政の終焉に伴う共和国の成立は、折り合いをつけざるを得ない現実として理性的に受け入れられたと理解されている。このような「理性の共和主義者」の姿は、「心情の君主主義者」であったマイネッケ自身には当てはまるものであるだろう。しかし、マイネッケの自己理解のために用いられた言葉を、その他の思想家に適用することには慎重な考察が求められるはずである。とりわけ、プロテスタント神学思想史の問題として考えた場合にはなおさらである。「理性の共和主義者」という見方には、共和国や民主主義についての神学的な考察が入る余地はなく、「理性の共和主義者」論を採用することは、共和国を支持した神学者たちは神学的な判断ではなく、時代の変化への現実的=理性的な妥協として共和国を支持したということの意味するからである。

2. 研究の目的

そこで浮上してくるのが、「プロテスタント神学思想史に「理性の共和主義者」論を適用することは妥当なのか?」という問いである。本研究ではこの問いに応える作業を通して、ヴァイマル期のリベラリズムについてキリスト教思想の面から再検討を行い、リベラリズムとキリスト教思想との関連を探求することを目的とした。従来の研究では、ヴィルヘルム帝政についてはルター派教会との結びつきが繰り返し指摘されており、ヴァイマル共和国に対する反対意見についても、弁証法神学やドイツ民族主義宗教など宗教的な発想との関連が明らかにされている。しかし、ヴァイマル共和国を支持する意見については、上述の通り、十分な検討なしに、世俗的な妥協の産物であるとされ、宗教的な意味づけはないものとされてきた。本研究はヴァイマル期の政治状況と宗教思想の関連についての従来の研究に欠けていた視点を補うことを目指した。

3. 研究の方法

本研究で具体的には、E・トレルチを中心として、A・v・ハルナック、W・ブセット、O・パウムガルテンといった神学者を考察対象として設定し、それぞれの神学者がヴィルヘルム期からヴァイマル期にかけて「リベラル」、「デモクラシー」、「共和国」といった概念をどのように論じているかを分析した。分析の焦点は、こうした概念には神学的な意味づけがなされているのか、なされているとしたらどのようなものかの検討である。

4. 研究成果

ヴィルヘルム期のプロテスタント神学の宗教的なりべラリズムの意味を考察するために、20世紀に入ってすぐのドイツで生じた「学問の無前提性」をめぐる論争におけるトレルチの主張を分析した。モムゼンの問題提起に端を発する「学問の無前提論争」の最中に書かれた初出時の結論では、大学の神学部がどのような性格の学者集団であるべきかを述べるものとなっている。この時期、すでにスイスやオランダ、フランスでは「宗教学」の講座が大学に設置されていた。これらの「宗教学」にしても、文字通りの意味で全くの「無前提」であることは不可能であろう。それでも、モムゼンが世俗的な学問に要求するような、特定の教派の信仰を前提とした宗教理解からは自由であると主張できたし、そのように受け止められていた。トレルチは、神学部における学問はそのような意味での「無前提」とは異なる意味、すなわち、神学者各自の持つ信仰理解を考察の出発点としながらも、その信仰理解を常に繰り返し問い直し続ける姿勢を保つという意味で「無前提」に遂行されるべきだと主張していた。神学は神学であり続けながら、キリスト教の排他的な絶対性の主張をも反省的な検討に付すことができるというのが、神学を「前提なき学問」として構想するトレルチの主張だった。

それに対して、著作集第二巻所収時の結論では、無前提な神学でも手放すことのできない「前提」とは何か明らかにされる。論考「無前提な学問」を最初に発表した1901年の翌年にすでに、「宗教心理学および宗教の認識論」と「歴史哲学」という2つのものから宗教哲学を構築するという見通しをトレルチは示しており、1913年に出版されたGS2にはその成果となる論考群が収録された。論考「無前提な学問」の結論の書き換えは、この十数年にわたる思索の結果として、(新)カント主義の超越論哲学を自らの神学の「前提」とすることを宣言するものである。この前提から帰結するトレルチの宗教哲学の限界があることは事実である。すなわち、カント主義の立場から遂行される宗教の認識論において認識の主体として、そして宗教の担い手として考えられる「人格」が、宗教史を考察する視点も拘束してしまうということである。しかし、「カント主義という前提を持つ前提なき学問としての神学」というトレルチの構想が、視点の拘束性という限界をも自覚する優れた批判能力を持つことは積極的に評価できる。『キリスト教の絶対性と宗教史』(1902)や「キリスト教の本質とは何の謂いか」(1903)における「絶対性」や「本質」という概念そのものの批判的検討、『歴史主義とその諸問題』(1922)における近代の歴史意識そのものについての歴史的批判がその証左である。宗教学においては20世紀の終わり頃に、「宗教」という概念が帯びる歴史的負荷への反省がなされ、いわゆる「宗教概念批判」が生じた。GS2に収録された断片的な著作に留まらず、トレルチの構想する宗教哲学が本格的に展開されていれば、現代的な「宗教概念批判」を先取りする内容になりえた可能性は十分にありえたと思われる。

ヴィルヘルム帝政期からヴァイマル期にかけてのドイツで宗教的りべラリズムの立場に立つ神学者たちが、政治的権威についてどのように考えていたのかを考察するために、ハルナック、ブセツ、バウムガルテン、トレルチにおけるカーライルの受容について分析した。その結果、ハルナックがカーライルの「衣装の哲学」からキリスト教史の基礎的な枠組みを受け取っていること、ブセツがカーライルの「英雄崇拜」を自分の生きる時代における指導者の待望に結びつけていること、バウムガルテンが「衣装の哲学」を基に教会の現状への危機感を述べた上で、イエスに対する「英雄崇拜」によりキリスト教的共同体を再建する希望を表明していることが確認できた。このように、カーライルはドイツの自由主義神学の様々な領域でインスピレーションの源となっていたのである。

カーライルの議論をもっとも直接的に同時代の政治的指導者の待望と結びつけ、かつそこにキリスト教的な意義を認めていたのはブセツであった。伝統的な社会形態や教会を中心にした信仰形態の喪失により、神への信仰やそれに基づいた人間相互の関係が見失われることへの危機感が提示されている。ブセツはこの状況からドイツ社会を救うために、キリスト教精神に基づいて労働運動を活性化させることのできる指導者が必要だと考えており、具体的にはF・ナウマンに期待をかけていた。

ただし、「衣装の哲学」はともかく、カーライルの「英雄崇拜」はブセツにしてもバウムガルテンにしてもかなり単純化されて受容されていたことも判明した。そのように単純化された英雄論に対して批判的な距離を保っていたトレルチの「偉人」に関する議論の方がむしろ、カーライル自身の「英雄崇拜」論に近かった。カーライルは「英雄崇拜」論において、プロテスタンティズムの遺産として、誰もが英雄になれる可能性が開かれたことを指摘しており、ブセツやバウムガルテンが理解していたように、そして一般的にそう理解されているように、必ずしも英雄と一般大衆の断絶を強調しているわけではない。その点では、ドイツ自由主義神学におけるカーライルの受容はねじれを孕んだものであった。

第一次世界大戦の間に首都ベルリンに移り、ドイツ政治の中核近くで帝政末期からヴァイマル共和国初期の動乱の社会を見たトレルチが新たな共和国においてどのような民主主義を求めていたかを考察した。

トレルチによれば、キリスト教は民主主義的であるか保守主義的であるかのどちらかであるのではなく、民主主義的傾向と保守主義的傾向を同時に併せ持っている。それゆえに、キリスト者はそれぞれの社会の中で、民主主義的傾向と保守主義的傾向のうちで比較的弱くしか実現し

ていない傾向を促進することを目指すべきであることになる。ヴィルヘルム帝政下のドイツ社会は保守主義的傾向が強いので、リベラルな民主主義が育成されねばならないと1904年時点のトレルチは判断していた。第一次世界大戦の敗戦により帝政が終わり、共和国が成立した時代状況においてもトレルチは、保守主義的＝貴族主義的傾向とリベラル＝民主主義的傾向がバランスよく実現した貴族主義的民主主義を志向する。ただし、共和国の成立からしばらくの時期、およそ1920年頃までは、社会民主主義の運動によりリベラル＝民主主義的方向が急激化するものの危険性と、それに対して保守主義的＝貴族主義的方向を維持することの重要性が強調される。その後、1922年くらいになると、民主主義の実現の前提として貴族主義を肯定的に受け入れることを求めている第一次世界大戦直後と比べると、ここでは民主主義を肯定することが、保守的＝貴族主義的方向を社会において実現する前提とされている。このような変化は、トレルチの時代診断を反映していると言える。しかし、保守的＝貴族主義とリベラル＝民主主義を結びつけようとする願いは、ヴァイマル共和国成立後のみならず、ヴィルヘルム帝政期から一貫したものであった。その意味で、ヴァイマル共和国を支持するトレルチを「理性の共和主義者」と特徴づけることは適当ではないと思われる。

貴族主義と民主主義の両立を訴えるトレルチは、その体制を真の「社会主義」であるとも考えていた。トレルチの主張では、個人の平等を前提とする「共産主義」とは異なり、「社会主義」は社会全体の中で個人が組織的に配置され、社会の存続と発展のために貢献するものだとされる。トレルチの民主主義論において、社会を構成する個人の能力や境遇の違いを無視することが、誤った急進的民主主義の理念として批判されており、それに対して、個人の差異を積極的に評価する貴族主義的民主主義が求められていた。トレルチにとっては真正な社会主義が、貴族主義＝保守主義的方向とリベラル＝民主主義的方向を同時に実現する方策だったのである。しかもそのような「社会主義」はキリスト教に内在的な理念を社会のレベルで実現する試みだとされているため、トレルチの社会主義論を独特な意味でのキリスト教的社会主義、あるいは宗教社会主義と呼ぶことができる。

以上のように、ヴィルヘルム期からヴァイマル期を通じてドイツ社会における貴族主義的民主主義の実現を追求した神学者であるトレルチの思想の内実を、従来の「理性の共和主義者」という決まり文句を脱して明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小柳 敦史	4. 巻 41
2. 論文標題 エルンスト・トレルチの宗教社会主義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 基督教学研究	6. 最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/278374	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koyanagi Atsushi	4. 巻 29
2. 論文標題 Tetsutaro Ariga and Christian Studies at Kyoto University after World War II	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal for the History of Modern Theology / Zeitschrift fuer Neuere Theologieggeschichte	6. 最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/znth-2022-0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳 敦史	4. 巻 74
2. 論文標題 翻訳 F・W・グラーフ「序章 多くの分裂を孕んだ人物」（「エルンスト・トレルチ 世界地平の中の神学者 一つの伝記」より）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海学園大学人文論集	6. 最初と最後の頁 125-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小柳敦史	4. 巻 69
2. 論文標題 無前提な学問としての神学 - 「学問の無前提性」論争におけるトレルチー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海学園大学人文論集	6. 最初と最後の頁 57-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳敦史	4. 巻 43
2. 論文標題 ドイツ自由主義神学におけるカーライル	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 基督教学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小柳敦史
2. 発表標題 ドイツ自由主義神学におけるカーライル
3. 学会等名 日本基督教学会第71回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小柳敦史
2. 発表標題 魂 が異なるものの認識-トレルチの歴史哲学から宗教哲学へ-
3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 江島 尚俊、三浦 周、松野 智章	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 480
3. 書名 現代日本の大学と宗教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------